

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一一八号）

目次

本願一実の大道…………近角常観：(2)

善智識を訪ねて…………福島政雄：(7)

信仰書簡…………池山栄吉：(12)

一道会の記（一）…………花田正夫：(16)

才十一卷 第一号

慈光



此の善財童子の像は奈良県磯城郡文殊院にある文殊菩薩の脇侍であります。久遠の童魂を以て師子奮迅する、しかも敬虔なる姿がよくあらわされてあります。

本願一実の大道

近角常観

我等人生問題に於いて、常に驚かざることは、從来自り

力法律のために拘束されて、進退谷まり、左支右吾、殆んど活路なき人が、忽ち本願「一実の大道に帰入するや否や、人生到る處、逍遙として有無を解脱するのみならず、光明ある、真実なる、永久なる立場を得ることである。『和讃』に曰わく、

『萬行諸善の小路より 本願一実の大道に

と、實に唯一不二の大道である。

此に於いて大いに注意すべき事がある。此所に至れば、直に此の如き我等を救済し給うが弥陀の本願であると、結論を急ぐのである。而して救済とは如何なる意義であるか。随つて救済されたる心持は如何なるものなるか。此等の実験なくして結論を急ぐのは、畢竟言語上の解決に過ぎないから、事實としては罪惡として見捨てられたも同様である。しかば救済とは如何なることか、といふに、

「本願一実の大道」とか、「本願円頓一乗」と云え
ば、單に本願を激賞誇張の言と考うるにあらざれば、嘆美
讚仰の形容の如く考えらるる傾きがある。然し聖人が折角
かく真摯確實に絶対不二の大道を宣伝したまいし真意を
頂かねば、残念である。

罪惡の者を飽くまで見捨てたまわぬ如來の大慈大悲をいただくのである。

或は矜哀といい、或は悲憫といい、或は憐愍という、即ち罪惡なるものは見捨てられ、煩惱あるものは流転するのが当然である。しかるに如來大悲の矜哀は其見捨てらるべきものを見捨てたまわらず、其流転するを憐愍したまいて大悲を注ぎて放ちたまわぬのである。

されど我等が罪惡は深重である。煩惱は強盛である。されど願力無窮にましませば、その罪業の深重にあきれたまわらず、その煩惱強情のものに対して飽くまで見捨て給はぬ大悲が、五却永却の御苦勞である。

『煩惱具足の我等は、何れの行にても生死を離ることあるべからざるを憐みたまひて、願を起したまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり』

『煩惱を断じなば即ち仏なり、仏のためには五却思惟の願、その詮なくやましまさん』と、如何に煩惱熾盛の吾人もかくまでの大悲の親心を頂ければ、真心徹到して、罪惡も、無常も気にかゝらず、煩惱の氷解けて功德の水となり、円融円満、身心悅予の境に入るのである。是れ即ち攝取不捨の利益にあづかるのである

し來るのである。

實にこれ自然の徳である。真如門の味である。この行は諸々の善法を摂し、諸の徳本を備う、極速円満す。真如一実の功德の宝海なり。故に大行と名づく。『華嚴經』に無碍の一道といふものこれである。『涅槃經』に一道清淨とあるも是である。

聖人は此の如き救われたる人生を嘆じて曰く。

『大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びねれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転す。即ち無明の闇を破り、速に無量光明土に到り、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵ふ也』

と。實に我等は曾無一善の徒ら者である。されど万徳円備の大善を与えるのである。虚偽不実の罪人である。されど清淨真実の御心を以つて見捨て給わぬのである。ここに於いて、その清淨真実の御心に打ち勝たれ、自然に功德の利益を蒙るのである。

『九十五種世をけがす、唯仏一道をよきます、菩提に出到してのみぞ、火宅の利益は自然なる。

真宗念佛聞きてつゝ、一念無疑なるをこそ希有最勝人とほめ、正念をうとはさだめたれ』天神地祇も敬服し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報を感じることあたわず。實に不可思議なる人生を実現

る。これが即ち救済である。本願一実の大道に歸入したる味である。

六三の意

『念佛成仏是真宗

萬行諸善これ仮門

權実眞仮をわかつとして 自然の淨土をえぞしらぬ』

本願一実の大道の前には、大小の聖人も、重輕の悪人も、同じく悉しく無限大悲の惠に浴するのである。我等が悪しければ惡しき程、悲憫したまう親心である。遁るるものほど放ち給わぬ願意である。この如き大悲大願に遇い奉ればとても遁れることは出来ぬのである。此の如き選択願心は遣る瀬なき親心を徹底せしめば止まぬのである。

『本願力にあひぬれば むなしくすぐる人ぞなき 功徳の宝海みちくにて 煩惱の濁水へだてなし』如何なる煩惱も罪業も、如來の大悲には支えきれずして頭が下がるのである。惱みが融けるのである。

『名号不思議の海水は 逆誘の死骸もとどまらず 衆惡の萬川帰しぬれば 功徳のうしほに一味なり。

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に 煩惱の衆流帰しなれば 智慧のうしほに一味なり。』

信樂開発の一念、不斷煩惱得涅槃の境か開け來るのである

『信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はすなはち報土なり 証大槃涅うたがはず』

されど我等は此に注意せねばならぬ、これは信の徳である。法の利益である。如來の恩徳である。光明の照耀である。月は磊々なる墳火岩の塊である。豊々たる冰雪の結晶である。日輪に照らされてかくの如く清涼にして鮮明である。されど月そのものは冷やかな一塊に過ぎぬことを忘れてはならぬ。

炭団は中心まで黒き炭である。鉄は飽くまで冷やかな金属である。されどこれをして中心まで赤くし、炎々として熱せしむるは、火の徳である。

我等、煩惱闇黒の徒が、如來火王の力によりて熾に焼かれるのである。されど吾々自身は冷やかな石、黒き炭、寒き鉄たることを忘れてはならぬ。

聖人悲歎述懐に曰く

淨土真宗に帰すれども真実の心はありがたし。虛偽不実のわが身にて、清淨の心もさらになし。外儀のすがたはひとごとに實善精進現ぜしむとんじんじやき 貪瞋邪偽おほきゆへ奸詐ももはし身にみてり。修善も難毒なるゆへに虛偽の行とぞなづけたる無慚無愧のこの身にてまことのこころはなけれども

弥陀廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ。

小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ

如來の願船いまさば、苦海をいかでかわたるべき。

蛇蝎奸詐のこころにて、自力修善はかなふまじ

如來の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん

と。嗚呼これ聖人の悲歎なり述懷なり。信卷に信德を述べ

尽して曰わく。

『誠に知ぬ。悲哉、愚癡鸞、愛欲の広海に沈没し、名利

の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真

証の証に近くことを快まず。恥づべし傷むべし矣』

と。而して歎異抄第九章に

『親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてあ

りけり』

の御教化、全く同じ悲歎に対しての御述懐である。

近時、求道者的人生問題につきあたりて窮迫を極め、又臨終病苦の極まるとき、又一たび入信歡喜の後、其の喜びの失われたがため、又煩惱の熾盛なるがため、人生の暗黒に泣き、前途の寂寞に心を傷しまむる人が多い。然していづれも歎異抄の九章、唯円房に対する聖人の御教化を以つて、ます／＼大悲の矜哀を頂くのである。他に対しても足を感じするものは、不足を感じつゝ猶自己の不足を感じる

最後に繰り返すことは、入信の一念には、必らず想いがけ無き不可思議の感にうたるのである。何となれば、必ず心中に予想することがある。たとえば無我になれたならばとか、此事が出来たなれば、喜べたなれば、死後が明らかになりたなれば等である。然るに決して是が予想通りになれるのである。十八十色、百人百色、各々この予想を作りて、其通りなさんとするが、即ち万行諸善である。

しかるに決して予想通りならぬのである。佛は「かねてしろしめす」というのは此出来ぬことを知らし召すのである。それ故に、無我になれない、喜ばれない、我等の心を知らし召して悲憫したものである。我等が人生の無常を泣くも、前途の暗黒を悲しむも、佛かねてしろしめして矜憐愍のやる瀬なき御心を以つて、飽くまで見捨てたまわぬが、佛の御誓である。我等はこの親心をいただくのである。此思し召しを頂くのである、是れ即ち選択願心である。矜哀善巧である。これ難度悔を度したもう大船である。無明の闇を破りたもう慧日である。いつの行も及び難き闇である、して見ようのなき溺れたる我等である。我等は明らかならんと企てるのではない。自ら助からんとあせるのではない。むしろあせりつゝある我等を矜哀し給うが如來の本願他力真宗である。

『無明長夜の灯炬なり、智眼くらしと悲しむな

の非なるを憂えつゝあるのである。されど如來は、我等の不足を感ずることの避くべからざるをみそなわして、その不足を感じる者を斥けざるのみならず、寧ろこれを悲憫して、飽くまで同情を以て恵み給うのである。

故に一たびこの恵みをきかば、人生初めて中心の寂寞を慰するのみならず、他に対する不足の感を抱くの罪惡たるを懺悔して、而も其心ありながら猶気にかゝらぬ氣樂の身になるのである。

又人あり、臨終、病苦激しく、力衰え口乾き、念佛だに唱うるあたわず、そのとき『娑婆の縁つきて力なくして終る時に、彼土へは参るべきなり』の一言をききて涙潜然として下り、如何にも大悲の憐愍の深きに泣いた。

又人あり、嘗て如來廻向の意味をきいて大歎喜を以つて信仰を得た。されど年所を経るに従い喜べなくなつた。これがために苦悶を極め、殆んど其極に達す。されどこの一刻の慶喜を反覆せんとする空望である。此の如きは入信の昔を顧みるがよい、喜びて而して入信したるものには無い、むしろ喜ばざる煩惱熾盛の我等を憐愍したもう大悲の深き親心をききて入信歎喜したのである。されば後念においても、如來は猶喜ばざる我等を悲憫したもうこと、昔に変りは無いのである。この大悲大願をいたゞくのである。近時この種の類例數えつくされぬ程である。

生死大海の船筏なり、罪障おもしと歎かざれ

これ實に、本願招喚の勅命である、真如一実の大道である

— 求道第十卷第九号より —

凡夫

凡夫は欲に著して道を去り、奉觀事まれなり。（維摩經）

凡夫は生死を愛して涅槃をおそる。（維摩經）

凡夫は多求の故に想を外に馳す。大士はひとしく観するが故に、内外寄るなし。（維摩經）

凡夫は諸の邪見に入りて彼岸に到らず。（維摩經）

凡夫は常を計するが故に、世を樂うて厭離せず。二乘は無常を観するが故に、世を厭うて物を化せず。皆仏意にたがひ俱に中道を失う。（維摩經）

善知識を訪ねて

福島政雄

善知識を訪ねてという題にいたしましたのは、華嚴經の入法界品、善財童子の求道物語について、私の出来る範囲のお話を申して見ましよかと云う積りであります。

最初に然し、華嚴經に私が親しみますようになります。その筋道を一通り申上げておきたいと思います。

これは今からもう三十何年になるかと思います。私が広島に居り、広島高等師範学校に居りまして、広島高等師範学校に専攻科がありました。その頃であります。が、その専攻科のために、佐々木月樵先生をおまねき致しまして、一週間ばかり御講義をして頂いたのであります。私もその学生と一緒になつてお聞きしたのであります。御承知でもありますようが、佐々木先生という方は、晩年に華嚴經、華嚴經の内でも入法界品の善財童子の求道物語に非常に熱心になつていた方であります。何でも大谷大学では

時も申します通りに私の二十六歳の夏からであります。それで親鸞聖人の方から云えば、華嚴經というものを非常に大切に味わつておいでになるということが教行信証の中にあるとありますで、そういう方からの刺戟と申しますか、そう云う影響もありましたけれど、然し善財童子といふものを中心として考えるようになりましたのは今のようないきさつからであります。

さてその前篇の方を申します。これはこの中心人物は釈尊であります。然し私としてはその華嚴經の前篇と云うものは殆ど読んで居りませんが、唯この種々な方のお導きによりまして、この前篇がどういうことを述べられてあるかと云うことの一応知らされて居るのであります。

さてその前篇の方を申します。これはこの中心人物は釈尊であります。然しその釈尊は毘盧遮那仏と一体の釈尊と申しますが、広大なる仮陀としての釈尊なのであります。

そして一体華嚴經というものは全体として何を言い現わしてあるものかということを伺います。と、釈尊のさとりの境地を描き出してありますと、この華嚴經というものは、釈尊の正覚の御眼にうつてくるところの全世界の姿であるところ云う風に受け取つて居るのであります。

そしてこの華嚴經の前篇というものが、その三昧を海印炳現三昧と云われてあります。つまり釈尊、毘盧遮那仏の海印炳現三昧のおもむきを写し出したものである、海印炳現三昧というのは、大海の水が静かに澄み渡っていますと云うと、一切のものがそのままの姿でその海の水に映つ

て来る、それを譬えにしまして、仏陀の大覺の御心の眼

のうちには、全世界というものがそのままの姿で、しかも

光にみち／＼た姿で映つて来ているのである。その有様を

うつし出されたものでありますからして、その三昧に名づ

けて海印炳現三昧、海の水に明らかに一切のものがうつる

ように釈尊の広大なる眼のうちに一切のものがそのままの

姿においてうつて来ている、しかもひかり輝いてうつつ

て来ていると、こういうようには理解させられて居るの

であります。

そしてその前編のところは仲々面白いところがあるよう

であります、釈尊は始めは菩提樹下の寂滅道場と申しま

すが、菩提樹下でおさとりをおひらきになつた、その座に

すわつておいでになりますが、その場所を動かすに普光明

殿といふところに姿を現わしますが、またその場を動かすに

天の方に、忉利天とか、兜率天とか、そう云う天 上界に

姿を現わしておいでになる。動かないで、あちらにも、こ

ちらにも姿を現わしておいでになります。

私は最初は非常に不思議に思いましてわかりませんで

りました。その場を動かすに普光明殿だ、忉利天だ、兜率

天だ、夜摩天だと云う風にそこに姿を現わしておいでにな

る。どうも不思議で私の考が及ばないと永い間思つて居り

る、こう云う現わし方がすこし解るようになつたようと思

うのであります。

そうでありますからして華嚴經と云うものは非常に広大

なと、同時に、非常に深い釈尊のさとりの心持を云い現わ

してあるお經である。そして全体がひかり輝くと申しまし

たが、仏教のお經のうちで一番明るい世界をうつし出され

たものであるかと思うのであります。佐々木先生もそう云

うことを云つておいでになりますが、成程そうなのであり

ましよう、私などは仏教のお經をろく／＼読んで居りませ

ん。読んでおるお經も極く少數であります大それたこと

は申せないのでありますけれど、例えば正法念經とい

うお經には地獄の有様をズ／＼と写してある。餓鬼道の有様

もうつしてある。然しまだ仏の世界もうつしてある。斯う

云うものであります全体が明るい世界であるとは云えな

い、ところが、華嚴經でありますと、全体が何ともいえな

い広大な光に照らされたそう云う世界なのである。

よく、この私などもそうでありましたが、青年時代には
仏教などは未香臭くて、陰氣であんなものに近づけるもの
かと、今の青年もそうであります私がもそうであります
た。

それが決してそう云うものぢやない、華嚴經などは仏教

ましたのであります。

ところがこの度このお話を申し上げますので、多少準備のつもりで、今の四十華嚴の初めのところをすこしばかり読み始めました、そしてよく考えて見ましたのであります。するとすこしそのところが解る様になつたと思ふのですが、どうでありますか。

この華嚴經の世界というものはおさとりの心にうつつて来た世界でありますからして、成程釈尊は菩提道場を動かないまゝで、あちらにもこちらにも姿を現わしておいでになるということは、その菩提道場の釈尊の深いお心に一切の世界が入つて来ているのでありますからして、一切の世界が入つて来て、そして釈尊のおつきになる御座となつてゐる。そうでありますからして、身動きもしないで、何處にでも現われておいでになるということが何だかわかる様であります。

釈尊の御心持が段々とおさとりの御心持が深くなつて行つたことが順序立てゝ言つてあるようでありますからして、初めは地上から段々と天 上界に昇つておいでになると云うのは、今のさとりの心持が段々段々と深くなる。深くなると云うのは、深くなる程、全世界の姿というものが釈尊のいるの中にすつかり入り満ちて来ると云うようなことになりますから、成程釈尊は動かずして天 上界にお昇りにな

るの極致とでも云つてよいのでありますけれど、これが斯う云う明るい世界をうつし出して居られる。仏教の最後のと云う明るい世界をうつし出して居られる。仏教の最後のところはこう云う明るい世界をこの世にうつし出す、或は顕現するということになるのである。そう云うことを示されてありますのが華嚴經であります。のみならず、これは近角先生からも承つて居りますことであります。大無量壽經と云うものは華嚴經を縮めた様なものであると云うようなことをよくお話のうちにうかがいました。成程そう云う風に承つて大無量壽經を読みますと、そうか——と云うようになるのであります。

大無量壽經を永い間お話し申し上げましたが、あれは矢張り全体が輝く世界なのであります。成程大經の下巻には、悲化段だ、五惡段だと云つて人間の非常に暗い罪惡のところを、煩惱のところを写し出されてありますけれども、それが前から申し上げて居ります通りに、それが佛陀のひかりに照らされている、そう云う様な世界があるのでありますからして、矢張り、あの悲化段、五惡段に照らし通しますひかりと云うものを私共は感ずるのであります。そうでありますからして、結局大無量壽經と云うものは上巻がひかり輝く世界をうつし出してあると云うばかりではなく、その光が、所謂くらい世界をも徹底的に照すところを説かれてある。そうでありますから結局華嚴經と同じも

のとなり、華嚴經よりももつと私共の煩惱の底を照らしとおされてあるというところが大經の特色なのであります。とに角、そう云うひかり輝く世界であつて、大無量寿經と云うものが、華嚴經を縮約したものであると仰言つたことは如何にもそ�であると云う風にもうけとれますのであります。

まあそう云う次第でありますてこの光り輝く広大な世界のことを行から申し上げようと言うのであります
が、今度から年に二回私がこちらに参ると云うお約束をいたしましたのであります。春一度、秋一度であります。そう致しますと三年間続きましたところで六回であります。広
大無辺な善財童子物語だけでも六回で申し上げられるもの
ぢやないのであります。その上私自身の寿命も問題であ
りまして、寿命が何時まであるかというようなことが問題
であります。それからまた、途中までお話を出来て
死んでもよいぢやないか、一番佛教のうちで光り輝く世界
を話しておつて死んだつてよいぢやないかとも考えるので
ありますのであります。それからまだ今のところでは死なぬ積りでお話を申し
て見よう、然し六回位の間に私の殊に感じを深くしました
ところだけでも申上げることが出来れば、それで私といた
しましては本望の次第であります。

信仰書簡

池山栄吉

妻を亡くして

近角老兄
とう／＼往きました。病症が癌とわかつてから半歳余になりました、しみぐ／＼となごりを惜ませてもらいました。

が、遂になごりはつきませんでした。妻の死ぬ数日前のことでした。急に今迄に覚えぬ胸ぐるしさを感じるとして、これが臨終ならんと申し、傍に居た私の腕をひしとわが胸にいだき、枕頭に侍していた娘に向い、一つ二つ心得となるべきことを云いきかしましたときは、一滴の涙が頬を伝わりました。漿水をとつて身神ともに樂になつてからは、どうかこのらくのうちにやすく往きたいとよく言つたものでした。その当時は氣づきませんでしたが、今になつてその有様を思い浮べますと、あれが即ち「なごりをしくおもへども婆婆の縁つきて力なくして終るとき」であつたと思ひます。しかしその時は幸におちつきまして、病人は、

新春法信抄

高知市

池山寿夫

恭賀新春。南無阿弥陀仏
慈光御恩賜はり誠に感謝に堪えません。……一道会の御

集いのおしらせ御なつかしく、且つ有難く、皆々様を想い出させ

て頂きました。本年は私も出させて頂こうと考えて居ります。
…………人生目出度いことは念佛一つましますことです。それ

につけ唯々念佛のほかありません。

東京都

柳瀬留治

五十何年 何一つほんものを持つて居ません。ほんものはお念佛だけ。ナムアミダブツ。

仙台市

田中克己

南なんまだ そうかそうかよ 初あらし
南なんまだ これがあるから 謹賀正

島根県

三瓶徳英

我利我慢 邪智十惡の我をきき 考え直す念佛のあるに
京都市

白井成允

尽十方無碍のみひかりかぶりつゝ いやあらたなる時にいむ
かう

境涯のこころこごりて結晶と かゞやく歌のこころにぞ沁む

香川県

玉尾延忠

その夕が臨終であつたとは、あゝ、何たるありがたき御はからいでしよう。

御教書をいたしました時、私はじめ一家のものは踊躍歎喜しました。病妻は諸根悦子の体でした。午後医者が見えまして、今日は衰弱は幾分増して居るにかゝわらず、非常に元気がよろしいように見受けたて、不思議がつて居られましたので、私が実は今日は、これ／＼のことがあつて大変よろこんでいると申しましたら、それでこそと申されたような次第で、何のことではない、一家はきわもなき法身の光輪につゝまれ、てらされた光景でした。

私は妻に言いました、お前はこの頃「もう、しておきたいとおもうことも、出来るだけ、して仕舞つたから、何もおもいのこすところはない、どうぞ身体の樂なうちに往きたいもの」とよくいうが、私は夫として、父として一日も長くいてもらいたかった。しかし今日は、ありがたい御消息を頂き、法名までも賜つた。願つてもない幸に遇わせて頂いたのであるから、御前は猶更のことであるうし、私も今はおもいおくことがなくなつた。實に百万の富をいただいたよりありがたいことで、もういつなんどき往つてもいいよ、と申しましたら、妻も大いによろこびまして、こんなうれしいことはない、どうぞ御書を大切に保存して下さいとくれぐも申しました。

う句と、老兄の御來示の御示し下された「恋しくば南無阿弥陀佛を唱ふべし、われも六字のうちにこそすめ」の歌は、私の此頃しばしば口誦むところであります。

妻の病症がわかつてから持前の筆不精も幾分直つたようでしたが、亡くなりましてからは、まだ手紙もかけません。先日台下に御札状を差出しましたのと、これが二本目です。猶申上げたいことは尽きませぬが、次便に譲ります。乍筆末、奥様へよろしく

大正七年五月三十一日夜。

頓首

母をしてくして

先達母の病氣をお知らせをして以来、だん／＼の御親切なお心附ありがとうございます。この不孝極まる私を、世に何より大事な者と思つてくれた母は、遂に往つてしましました。

母は臨終に際して、平生業成のありがたさを、最後の教訓としてのこしていつてくれました。それは言葉を以つてなく、行を以つて説ききかせてくれたのであります。何しろ八十八歳の高齢で、この二三年来は、身心ともに弱つていたところに、先月十二日急に胃腸の加減で発病して以来、身体も自由にきかず意識も朦朧として、目醒めている

どうでしよう、苦惱の有情をしてたまはざる淨土の慈悲の御心の發動は、我等夫妻をして、今生の哀別離苦をさえ忘れしめ、たちがたき恩愛の絆をすぐたたれました、あゝ、何たる偉大な御力でしよう。

そのゆうべでございました。妻は病床に身を起させまして、庭の面をながめながら、水じるこをこしらえさせて、いたきました。（死ぬ前には水じるこをたべさせてもらうと、数日前に言つたことがありました、後で思うとその通りになつたのです）。たゞ終りまして、あゝおいしかつた、ねかしてもらいましょ、といつて、横になるや、間もなく咽喉部に妙な喘々という音がきこえましたので、私は変におもつて、どうしたといいますと、樂です、と答えましたので、それでもなんだかここに（咽喉に手をふれて）妙な音がするではないかと重ねて申しますと、妻は従容として、これが臨終でしよう、と申しまして、医を迎えてやるものもとめた位でした。それから種々に手を尽しましたが、その甲斐もなく、翌朝四時頃に息を引き取りました。

あゝ、亡妻は私と共に長らくの間、親身も及ばぬ御世話を老兄からいただきました。亡妻は生前、老兄の御親切に感泣して居りました。謹んで御札申上げます。

御親の 中にある「去りながら人の世は皆春の雪」とい

時ですら夢心地で、現実には適合しない、多くは香氣なことばかり言いますので、傍についているものは、いゝ加減にバツを合して行くといつたよな風で、看護しながらも、時々吹き出す様なことがまゝありましたが、病勢は間もなく衰えましたけれど、衰弱の方が加つてしまひまして、遂にいけなくなつたのであります。丁度亡くなります前々日の事であります。この日はいろ／＼の注文を出されるので、ついているものも一寸手こづつたのであります。だが、この時私は御母さん、それはそうと一しょに御念佛を申しましよと言つて、高声に念佛をくり返しましたら、その心が通じましたか、母は急に手をさしのべて、その先を組合わせ、一生県命に瞑目して、高声につゞけさまで御名を唱えられました。

今から思えば、歎異鈔の『たゞ今さとりをひらかんするこのちかづくにしたがひて、いよ／＼みだをたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめ』とあるのは、実にこの時の有様であつたと、必々思い合わされるのであります。それから間もなく落ちつきまして、昏々として深い睡におち、その翌日もすうつと同じ容態をつゞけました。そして其翌日の朝には、もう息づかいがちがつて来たのであります。つまり私と意識を交換した最後は、もろともに念仏をとなえたことであります。誠にありがたいことで

ございます。『たとへ病悩苦痛せめて、正念に住せずして終るとも、攝取不捨の願をたのみたてまつる』身の心安さ、母は最後にこのことを切実に思い知られてくれました。

母の死と共に、四十八年うけ来つた護持養育の鴻恩を、いくらかおもしり知らせて頂きました。己が身の恩知らずたることを自覚すること愈々深くして、生育我身大悲母の恩徳の広大なることを、益々思い浮べずにはいられません。同一に念佛して、生まれ甲斐ある身として下さつたのは、全く母の手引きによつたのでござります。

その母に対して生前何一つ孝行らしいこともせず、誠に申し訣無い私が、たゞ一つ今に心に快くかんじますことがあります。それはかつてお話をいたしたこともありますが、歎異鈔を母と共によんだことで、私が念佛の申されようになつて以来、歎異鈔を拝読したことは、いくたびか知れませんが、少くともその半分は、母と共によんだのであります。それは私がいざ歎異鈔を読もうと思ひました時は、いつも大抵母をそばへよびまして、よんだものであります。母はこのことを大層よろこんでくれました。しかし打ち明けた処を申しますと、きょうは一番御母さんのためによんで上げようと思つたことは、たゞの一度もあります。どうせ自分がよむのだから、序に母にきかせよう、別

段邪魔にもならないからと、いつた位な気持であつたのであります。要するに一から十まで勝手でやつて居つて、こちらからは、何一つ持ち出さないのに、そのことがたまたま母の心をよろこばせ、満足させることが出来たとは、何とありがたいお計らいではありませんか。これにつけても私は、この頃あの非行非善というふうなことを、しみじみと味わせて頂いていたのであります。

母は辱くも御法主より、開信院釈尼妙馨と云ふ法名を頂きました。開信院とは實にありがたい名で、私はその文字を見て、眞に母其人を思い浮べることが出来ます。さり乍ら母といい、妻、獲信院蓮香と云い、同一身に別れまして、凡情の淋しさを秋の夕に感ずるに同時に、後れて人にみちびかれ、さきだたば人を導かんと云う御文も、つくづくと味わして頂くのであります。

大正八年十一月十八日

近角老兄

座下

池山 栄吉

一 道 会 の 記

(一)

花 田 正 夫

昨年十一月三日、京都淨住寺での一道会の集りで、池山先生の御遺骨のまつられた方丈で、一人々々の所感が述べられました。松山から参會せられた松本解雄さんが「こう云ふ意義深い集りは日本國中おそらく外に現在無いのでないかと思います」と驚異の声を放たれましたが、まことにひかり輝く一日でありました。

別場の写真は淨住寺方丈前の記念写真であります。今はその席上での信国さんとの、当日は沈黙されていた榎原さん御夫妻の追想を頂きました。

ちました。その時同時に池山先生も谷大に来られたのですが、おやめになつたのは昭和十二年です。當時私の心境として池山先生の居られない谷大は、まるで魂を取り失つた場所に感じられ、建物はあり学校はあつても、空虚な、落漠としたものに見えました。そこへ、郷里の九州の田舎で苗守番をして居た祖父が老年になり不自由なので帰れと言つて来ましたので、自分は寺に生れた身であつたのにお粗末にして居つたと氣付いて帰りました。

それから十三年の終りに、先生がお悪いということで、奥様から招かれましたが、生憎病氣でスグ出ることが出来ず、体力の恢復するのを待つて上洛し、早速蓮華谷に参りましたが、先生は恰度その朝亡くなられていきました。引き続き重信会館でお葬式があり、それにお参りしたのを最後として、京都を去りました。

それで私は昭和四年に東大を出、四月に大谷大学に職を持

字長年
○
信 国 淳

九州の寺から廿年振りに京都に参り漸く一ヶ月経ちました、そして今日のお招きを頂き、待ちに待つて参らせて頂きました。

さて私は昭和四年に東大を出、四月に大谷大学に職を持

それから数えると今年で恰度廿年になるのです。私には

京都と云う土地は池山先生と引き離すことの出来ない所です。今日も、こちらにお参り致しまして感情が先だつて、冷静な話をするには難儀なことです。

私は東大の学生の頃近角先生のお話を承つていました。当時は信仰ということに余り関心がありませんでした。それでも身体の上に何か催すものがあつたのかお話をだけはお聞きして居りました。

昭和四年、池山先生とともに大谷大学に職を奉じ得たことが、私には非常に嬉しかつたのであります。それまでにも先生の著書をまぐれに読んだことはありました。が、そうして目のあたり先生に接する機会を得たことは實に嬉しいことでした。

人は誰も地上におつて自分のほんとに信用出来る人とのめぐり会いを求めているのです。まいか。

洛北の「山花」と云ふ料理屋で、大学の歓迎会が催され、私は末席から先生の模様をうかがつていきました。それが先生のお姿が私の心に深く刻まれた初めでありました。それからすぐお伺いすればよろしいのですけれど、何だか近づくのがおそろしかつた、先生は何處となく威厳があり、その前に出ると、自分のアラを曝き出されるのが堪らなかつたのであります。

このようにして何年か職員室で先生のお姿に接するだけ

間なく往きこうわれのこゝろと

それは恰度、秋の今頃だつたと思ひますが、それから年末にかけて先生にお会いしたい気持がつのつて行つた。そこで年賀状に前の歌を書いて先生に送りますと、折返えし先生から、年の始めに念佛の会を催すので来るようによい招待をうけました。自分としては思ひきつたことをした

出過ぎたことをしたとビク／＼で伺いました。

その日は先生のあの洋間に、大学の先生や、学生さん、奥さんお嬢さん方も多勢集つてこられた。私のそれ迄に知つてゐた念佛の集りは年寄だけであつたのに、これは全く異つた集いでし、全く異常な感じをうけました。私は大学でフランス語を学び、文学青年のようなところもあつたと思ひますが、その自分が今やこうして初めて聞法の会座に入れて貰うことになつたのです。

先生が次から次へと指名せられて種々の方が所感を述べられました。自分もひよどり指名されるのでないかと内心ビク／＼ものでした。その時の先生のお話は覚えていませんが、岡山から来られた、谷本才藏さんという方が、確か下駄の職人であつたと思ひますが、その方の話に感動させられました。「自分は職人で朝早くから仕事場に出るので仕事にとりかかるか、かゝらぬかに、もう胸の内は色々な煩惱が動くばかりで、全く浅間しいものであります」

おりましたが、當時稻津紀三さんが教授室の片隅で、先生と親しそうに話していられるのを見かけたりすると、何だか美しい感じがしました。

其後、私は結婚しまして、両親と家内と四人の生活が始まりました。そのうち家族の間の相互關係に人間として避けられない深い根本的な弊あることに気附きました。それは形の上に現はれぬけれど心の領域についてみると、子と云いながら、矛盾した、へだてのやまぬ私共の生活、そして、それが私にはどうしてみようもない姿であることが感じられ、何かしら、心のやり場を求めるようになります。

或時、フト、念佛ということを思い出しました。私は寺に生れましたが、両親が早くから京都で育ち、寺とは全く遠ざかつて暮しました。それでも母に連れられて総会所に参つたこともあります。うつら／＼、念佛の声を聞いて育ちました。そうした御縁からでしようか、念佛と自分の心との間には何か関係がなければならぬというふと気づき、独りで念佛してみる気になりました。そして念佛に心を集中させて居りますうちには生れて初めて自分の心の内面といふもの、自分の心の妄念妄想の姿といふものを垣間みたような気がしました。

南無佛と称えて知りぬ雲霧の

と云つて高声に念佛を称えられました。

その日私は非常な感動を受けて帰つたようで、家に着くなり家内を呼びよせ、「私はお淨土に参らして貰うのだ。何も淨土が美しいところと観念するのではない。又理窟で考えることでもない。たゞ現実に念佛している人たちを私は見た、私もたゞそのあとを行かせてもらうだけなのです……」と興奮して話したことを覚えてます。

そういうことから私も先生のお宅に度々お邪魔するようになりました。それは先生の極く晩年の三、四ヶ年のことあります。只今、のこと、このことが……思ひ出されて来るのであります。が、先生からうけたお教の中でも、一つ二つだけここで申上げます。

第一は、佛の本願に向う私共の態度についてあります。蓮如上人は御承知のように繰返し「一心一向」ということを云つていられます。が、態度といふのは、その「一心一向」のことです。先生は独文学の御造詣が深かつたので、その「一心一向」を、ゲエテの「美しき魂の告白」の主人公を例にとられ、「佛の願力に向つて一直線に心を向ける、自分のことを顧みずに、たゞ前方に、上方に向つて自分を挙げて集中する、正坐して佛願力を、文字通り、仰ぐ」ことの大切さを私に教えて下さつたのです。

歎異鈔二章では、聖人はよきひと法然上人をとおして如來と一直線に正坐していられる。南無阿弥陀佛の信心は、念佛に私共がつけ加える信心ではないのであつて、念佛の信心そのものを頂くのです。頂くのには頂く態度というものが私共に必要です、頂く態度のできないところに、頗力自然の信心が頂ける筈はありません。そういう態度ができるなくとも若し信心が獲られるというのなら、それは信仰の暴力というものでしよう。「念佛をとりて信じたてまつらんとも又すてんともめん／＼の御計／＼なり」と聖人も云われますが、「めん／＼の御計らひ」というところに、ほんどうの意味で信仰の自由といいうものがあるのでしよう。そういう自由を先生は、「獲信途上に許されたる唯一のはからい」として、晩年特に強調されていたように思いました。こうして先生は私に、真向ひに本願に向う、自分をすてゝ一筋に本願に向う態度というものをお教え下さいました。

次に、私は獲信のよろこびにひたつた余り、大分高揚りした状態が続いたのであります。そういうことも先生はとつくりにちやんと御存じで、その頃私がお伺いすると、「そのところからはこちらに曲るんだ」とでも仰言つているように、今から思うと色んな御教示にあづかつたものです。

或日フト、先生は、「洽」といふ字を示されて、「これは何と読むんですかね」と私にたづねられました。私は何気なく「あまねく、あまねし」と読むんでしよう、と答えました。勿論先生がそれを知らなかつたわけではなく、今から思うと先生は、そんな些細なことを通してまで、この愚かな私に本願の尊いみ旨を教えて下さろうとしたのです。

念仏は唯單なる個人の救いではない、単なる自利のものでなく、あまねく一切衆生を救わんとの如來本願の念仏であることを見出します。勿論先生がそれを知らなかつたのに違ありません。まさに念仏は自利々他円満の大行であります。

又その後、先生のお宅で会があり、稻津紀三さんと椅子をならべて何か話をしています。私どもの方に向われて、しかし誰に向つてといふ風でもなく、厳しい調子で申されました。

「念仏者は名を求めてはならぬ、無名といいうことが大切である！」

まことにこのお言葉は私にとって頂門の一針だつたのだ、と私はその後になつてどうやら気が附き、今もなお時々思い出しては、そう仰言られた先生の深いお心持を私なりにしみ／＼と味わせてもらうのであります。

発表したか忘れてしまつたが奥様が指名されて用意した紙片に書いたお味わいをふるえながら読まれたことを覚えていた。先生はそう云ふ場合、妻に対する夫ではなかつた、奥様も先生に向つたこうした時は吾々と同じ弟子の一人として先生を仰いて恭々しくお念仏の心境を述べられるのであつた。

話はあともどりするのだが、(それを私は言ひたかつたのであるが)、その報恩講記念講演会の時の先生は、いつでもの先生、たとえば今云つたお宅での会やその他の講演会での先生とまるで違つた感じを受けたことである。

常々先生のお話を承つてみると、先生は親鸞聖人ではないのかと思えるほど歎異鈔から脱け出てこられるお姿に接するのである。「親鸞におきては、とあるのを、他山におきに……」と何邊拝聴しても、池山とおきかえられたはず

の先生であるが、私に写つてくる、ひゞいてくるのは親鸞聖人が現に出て来られ目前に在す感じがすぐ私を包んでしまつのであつた。つまり師聖人として、そうした先生、吾等の先生であり師である池山先生であつた。ところがその日の先生のお姿は御開山親鸞聖人に対する絶体帰依の弟子としてのお姿である。「今日は私にとつて、この世になく

つてならない聖人の御正忌に当るのだ、その報恩講なのだ」という、師なる聖人につゝましく隨從帰敬されている弟子なる姿であつた。親の前に坐つた小供というか、全くいつもと変つた態度が、その御服装にも嚴肅に現れているのであつた、一口に云えば先生は當時不斷、聖人に師侍されてゐるその正面のお姿は常々拝してゐるが、今日の先生は正受対面されている後ろ姿、弟子としての先生を計らずも拝して私は涙を催したことであつた。

○ 神原和子

池山先生が名古屋の信道会館へおいで下さつた時のこととでございます、講演が終つて後控室へお邪魔して直接先生にお目にかかり、その頃私の問題となつていました歎異鈔第七章の『念佛者は無碍の一道なり』というお言葉の中の『者』についてお尋ねしました。先生にお尋ねするには大変勇気がいりました、ふるえながらおたづねしたことを覚えております。そのころ私は慈光に浴しお念佛させて頂いて居りながら、余りにもお祖末であり汚ない自分にあい想をつかしておつたので、『念佛者は無碍の一道なり』と仰せになる聖人の御言葉でありますけれども、私は有碍ばかりであります、『念佛は無碍の一道なり』との仰せならよくわかりますが、どうも『念佛者』の『者』が邪魔になつ

て困つている、というようなことを先生に申上げたように思います。先生はその時お帰りの汽車の時間が迫つていらされたのでしたが、態々一列車遅らせて下されお話し下さいました。それは大体次のようなお話でした。

ある年の正月元旦のこと、何の感慨も湧かないまま若水をつかつてから仏前に坐して暫らく両手を合せていると、過ぎ去つた年の日々のことが、あれこれと想い出されてくる、失敗したこと人に迷惑をかけたこと、口にも出されぬ色々の煩惱罪惡等々次から次へと胸に浮んでは消え、浮んでは消える、その時、私の口からは静かに念佛が称えられていたのにフト気がついた。私はそのとき、ア、私には、ア、私には念佛がある、久遠劫より廻向し続けて下さる如來様がついていて下さる。私のいま胸に次々とうかぶ悔いのあとの一一つを念佛は即座に一つ一つ埋めて下さる。そして『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』と呼び続けて下さる。私は『一心正念直來』を『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』と振仮名をつけましたが、これではお答えにならないかな。

先生はこんなふうにお話し下さつたようにお覚えております。私はそれから暫くのあいだ『者』が心に引つかつた

まゝでおりましたが、或る時、一心正念直來のお言葉の次に『衆て水火の難に墮することを畏れざれ』のお言葉のあるのをフト気づき、ア、そうかと思わず膝をたゝきました。水火の中に喘いでいるのが私なのであつた、水火そのものが私であつた、それを『墮することを畏れざれ』と力強く仰せになるお言葉を忘れて、如來様に背を向けていたことに気づかされたのでございました。爾来、池山先生を思うとき、いつも一番最初に心に浮ぶのは、この場の光景とわけても『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』とおさとし下さつた先生のお姿でござります。

還詠 池山栄吉

惨怛たる悔いの残せし一一の

あとかたもなき無碍の一道

たのまるるただ念佛のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ



編集後記

謹みて新春を賀し奉ります。

昨年來近角常觀先生の大切な原稿を慈光誌へ転載させて頂いて参り、皆様方が或は驚かれ或は聴聞の間違いに気づかれるなど、有難い通信を頂きました。本年も引続いて頂きます、どうが大切にお読み願います。

思うに今は亡き方にお会い申すには、文字より外にありませぬ。文字はその方の血の通う法身であります。先生が書かれた原稿というだけでなく、先生のいのちをうけて頂きたいものであります。

又四十華嚴、善財童子求道の福島先生の御講話の記を月々頂き、私共も童子の求道魂に引きたてて頂きませう。

冠頭の善財童子の合掌求道の旅姿こそ、眾尊の永遠に若々しいかがやくお生命の象徴であり、われらが導かれて辿る往生成仏の旅であります。

池山先生の信仰書簡は、求道誌にありましたもので、先生も奥さまも四十台で別離された時の御心中であります。

奥様は胃癌不治となられて一層怠

京都市右京区山田開町淨住寺
樹原徳草
樹原和子

御案内

毎月第一、第三、第三曜午后一時半、日曜講話会
一道会館、南区駆上町二丁目。市電新郊通り二丁目

られたのちの先生の信書であります。

又次の年に八十八の御母堂と別れられた時の御信簡は私共に種々の信味の頂けるものであります。

一道会の記は、信国さんと榊原さん御夫妻の池山先生を追慕されての記録を頂きました。

執筆者御住所

東京都調布市仙川町七九四番地

福島政雄

京都市下京区高倉通り六条上ル

発行所 慈光社

名古屋市南区駆上町二ノ二八
名古屋市千種区千種町馬走二八
振替口座名古屋一〇四七〇番